

自民党支持層の時点間比較

——『国際化と市民の政治参加に関する世論調査 2017』の分析（4）——

和光大学 米田 幸弘

1 目的

本報告では、2009/2013/2017年の3時点の全国調査データを用いて、自民党支持層の時点間比較をおこなう。自民党が野党を経て与党第一党に復帰し、長期政権へと至る8年間で、支持層はどのように変化したのか、自民党の長期政権を可能にしている人々の政治意識はどのようなものかを明らかにすることを目的とする。

2 方法

2009年10月～12月と2013年11月～12月、2017年10月～12月の3時点で行った『国際化と市民の政治参加に関する世論調査』のデータを用いる。その3時点のデータで共通の質問項目を説明変数に投入し、自民党支持を従属変数に用いた二項ないしは多項ロジスティック回帰分析をおこなう。説明変数には、性別、年齢、学歴、職業といった基本変数に加えて、権威主義的態度や生活満足度のような基底的社会意識、さらに、ナショナリズム（愛国主義、排外主義）や経済にかんする価値意識（平等主義、競争主義）、政治的効力感などの意識変数を用いる。

3 結果

分析の結果、2009/2013/2017年の3時点をつうじて、年齢が高い人や、職業が自営である人、権威主義的な価値意識をもつ人、生活満足度が高い人が自民党を支持するという傾向が少しずつ低下していた。逆に、ナショナリズムや、政治的効力感が自民党支持に与える効果は高まっていた。愛国主義的であるほど、政治的効力感が強い人ほど、自民党を支持する傾向が強くなっている。経済についての変数は、3時点でそれぞれ異なる動きを取っているが、共通して2013年で効果がもっとも小さかった。自民党がアベノミクスを経済政策として全面的に押し出したことにより、格差の是正や市場改革のような論点が一時的に無効化したが、2017年には再び支持を決める要因として浮上している。

4 結論

以上の結果から、2009～2017年の8年間で、自民党の支持層が変化していることが明らかになった。旧来型の特徴である、伝統的職業、伝統的価値、委任志向、現状肯定的という自民党支持層の「保守」性はこの8年間で弱まり、新たな層が支持層に加わっている。また、ナショナリズムや経済などの政策争点に関わる価値意識は、個別の変数で動きは異なるものの、全体的には政党支持を決める要因としての重要性を増していた。政党支持は、職業利益や、世代効果によって形成された価値観による長期安定的な結びつきから、個別の政策争点に結びつくような価値意識によってより規定される方向に向かっていると言える。

謝辞 本研究は、科学研究費補助金基盤研究（B）（25285146）の助成を受けたものである。また本研究で用いたデータは、同研究費を受けて行った『国際化と市民の政治参加に関する世論調査』によって得られたものであり、同調査の回答者の皆様に重ねての謝意を表したい。